

「フェミニスト出版社現象」を振り返る ——ヴィラゴ・プレスを中心に (1)

英 美由紀

2018年、イギリスのフェミニスト出版社の草分けとして知られるヴィラゴ・プレス (Virago Press) の「モダン・クラシックス・シリーズ (Modern Classics Series)」が発刊40周年を迎え、記念書籍の出版が相次いだ。同シリーズは「失われた」女性作家によるフィクションの再版を中心に、現在までに700点以上のタイトルを刊行している。その中からシリーズ第一弾となったアントニア・ホワイト (Antonia White) の『五月の霜 (*Frost in May*)』(1933; 1968; 2018)をはじめ、ミュリエル・スパーク (Muriel Spark) 『メメント・モリ (*Memento Mori*)』(1959; 2018)、アンジェラ・カーター (Angela Carter) 『魔法の玩具店 (*The Magic Toyshop*)』(1967; 2018) を含む14作品が、序文も新たに「40周年記念コレクション (40th Anniversary Collection)」として再版されたほか、40作品の従来序文を収録した『読者としての作家たち (*Writers as Readers*)』も編まれた。

またそれと期を一にするかのように、歴史学者キャサリン・ライリー (Catherine Riley) による『ヴィラゴ・ストーリー——フェミニスト出版社現象の影響を再評価する (*The Virago Story: Assessing the Impact of a Feminist Publishing Phenomenon*)』と『フェミニズムと女性文学入門 (*Feminism and Women's Writing: An Introduction*)』も発表された。前者は1970年代に始まるイギリスの「フェミニスト出版社現象」以来、¹ 現在も唯一存続し、創業45年を迎えたヴィラゴ・プレスの歴史を、その間の時代や社会、とりわけフェミニズムの変容や、それにともない変化してきた同社の出版物との関連においてたどるものである。また後者は女性文学をフェミニズムとの関係において概説するものだが、その第1章「カ

ノンジェンダー化する (“Gendering the Canon”)] を、モダン・クラシックス・シリーズをケース・スタディとしつつ、文学の正典、文学賞、書評、出版業界のジェンダー構築的側面の議論にあてている。すなわち、同シリーズに代表されるヴィラゴ・プレスの出版活動を、女性作家の「再発見」や、それによる文学カノンの「再形成」といった初期のフェミニズム批評の文脈に位置づけるものである。

実際、同シリーズの文学や批評への貢献は、これまでも概ね肯定的に評価されてきた。例えば作家マーガレット・ドラブル (Margaret Drabble) が、「モダン・クラシックスは文学史を作り替え、我々の読書を豊かなものにした。それを所蔵していなければ、図書館は完全とは言えない」とコメントするなど、「折り紙つきの地位」を得たともされる (Gilbert, Decotils, and Schartel 79)。一方、ヴィラゴ・プレスの「フェミニスト出版社」としてのあり方をめぐっては、批判的な意見が表明されることも多かった。同社が完全な独立を保っていたのは1977-82年、87-95年の比較的短い期間に限られ、それ以外は大手出版グループ傘下であって、現在もフランス系の出版社グループ、アシェット・リーブル (Hachette Livre) のもとにある。こうしたあり方がヴィラゴ・プレスの経営を安定させ、存続を可能にしたであろうことは想像に難くない。実際、同時期に創業した他のフェミニスト出版社は、いずれもすでに経営を停止したとされている (Chisholm; Riley, *Virago* 1, 6)。しかしそこで問題となるのは、巨大資本に組み込まれた同社の、政治的主張との両立である。つまり、出版ビジネスにおける資本主義的、父権的側面を認識することで、フェミニズムのメッセージが希薄化した可能性である。実際、1995年に同社がリトル・ブラウン (Little, Brown) に売却された際、メディア等に「フェミニズムは死んだ」と解されたとされる (Riley, *Virago* 87)。また現在も、ホームページ上の自社の説明「女性による書籍の国際的出版社」に、「フェミニズム」や「フェミニスト」などの語は見当たらない (“About Virago”)。しかし、こうした批判があることも紹介しつつ、「ヴィラゴ・

プレスの既刊書を一瞥すれば、フェミニストとしての資格と同様、同社が文学に与えたインパクトはおのずと明らかだ」と擁護する声もある(Chisholm)。またライリーも全体として同社に寄りそった見方を示しているが(*The Virago Story*)、これについては、創業者へのインタビューに多くを負う同氏の研究方法も含め、これまでの議論の経緯を振り返ったうえで(再)検証することにも意味があると思われる。

そこで本稿は、イギリスのフェミニスト出版社現象を代表する存在として、またその経営のあり方を含め議論されてきたヴィラゴ・プレスに焦点を当て、まず(1)その創業とモダン・クラシックス・シリーズ刊行の意義を再確認する。また稿を改め、(2)同社の経営と政治的な自律性をめぐる議論を紹介し、考察する。(1)では女性の出版業への参入を歴史的に遡り、ヴィラゴ・プレスの創業を1970年以降のイギリスの第二波フェミニズムとフェミニスト出版社現象に位置づける。また同社の代表的出版物であるモダン・クラシックス・シリーズの意義を初期のフェミニズム批評と呼応するものとして論じるが、ここではホワイトの『五月の霜』に着目する。若い女性主人公の著作の困難と挫折というこの作品の主題は、伝統的に男性がその中心を占めてきた文学という体系において周縁化される女性作家の位置を如実に表すものと言え、当時の批評やシリーズの趣旨を体現するものであったと考えられるからである。また次稿となる(2)では、ヴィラゴ・プレスが大手出版グループ傘下に編入された経緯、その背景的要因をなす社会経済状況の変化やフェミニズムの変容、またそれにまつわるこれまでの議論を概観し、改めて検証することになるだろう。

1. 文学カノンの見直しと再形成

都市部に住む中流階級専業主婦の心身の不調を「名前のない問題」として取り上げたベティ・フリーダン(Betty Friedan)の『新しい女性の創造(*The Feminine Mystique*)』(1963)が、性別役割分業や女らしさを問題化する第二波フェミニズムの先鞭をつけ、その3年後には全米女性機

構 (National Organization for Women; NOW) が結成されたアメリカの動向は、イギリスにも多大な影響を及ぼした。1968年に女性参政権獲得50周年を迎えていた同国には、すでに男女同権グループが存在し、同年にフォード社ダゲナム工場の労働者階級女性が行った同一賃金を求めるストや、それを受けて翌69年に全国的に展開された闘争は、1970年の同一賃金法 (Equal Pay Act) や75年の性差別禁止法 (Sex Discrimination Act) として結実した。運動の推進力となったのは急進左派政治で活動する女性たちであり、これがイギリスの運動に、アメリカで支配的なリベラル・フェミニズムやラディカル・フェミニズムとは異なるマルクス主義的側面を与えることにもなった。しかしイギリスのフェミニストたちはアメリカに倣い、1968、9年にアトランティック・シティで行われたミス・ユニヴァースへの抗議デモに続いて、1970年にロンドンでミス・ワールドに反対するデモを行った。また同年オックスフォードで、初の全国女性解放会議 (Women's Liberation National Congress) を開催し、²これが「イギリス・フェミニズムの新時代を公に宣言するもの」となった (Whelehan 116)。³会報誌『シュルー (*Shrew*)』によると、1971年終わりまでに、ロンドンだけでも56の女性団体が存在していたという (Walters 108)。

第二波フェミニズムは学術の諸領域にも波及し、文学批評においてはケイト・ミレット (Kate Millett) の『性の政治学 (*The Sexual Politics*)』(1969) が、男性作家の手になる作品を男女間の権力関係の反映と強化として批判的に考察した。同書はイギリスでも1971年に刊行され、以降多くの版を重ねた。その後研究の焦点は女性作家・作品へとシフトし、女性文学の系譜の再発見や男性中心主義的な文学カノンの見直しへと向かうことになった。⁴エレイン・ショーウォルター (Elaine Showalter) により「ガイノクリティシズム (gynocriticism)」と称された一領域であり、ヴィクトリア朝から現代までのイギリスの女性作家の段階的な発達を跡づけた、同氏の『女性自身の文学——プロンテからレッシングま

で (*Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*)』(1977) や、男性中心的な文学伝統にあって、女性作家が抱える「作者性」にまつわる不安やその克服のプロセスを19世紀英米の女性文学に検証したサンドラ・M. ギルバートとスーザン・グーバー(Sandra M. Gilbert and Susan Gubar) の『屋根裏の狂女——ブロンテと共に (*The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*)』(1979) は、その代表的な著作である。⁵

こうした批評のあり方を出版を通じて後押しすることになった(ヴァージニア・ウルフの『自分ひとりの部屋』の表現に倣うなら、女性作家の作品が存在しない「本棚」の空隙を埋める役割を果たした)のが、フェミニスト出版社であった。アメリカでは1970年にフローレンス・ハウ(Florence Howe) がニューヨークでフェミニスト・プレス(The Feminist Press)を創業し、同年「リプリント・シリーズ(Reprint Series)」の刊行を開始していたが、⁶それに続くように、1973年ヴィラゴ・プレスが創業した。

イギリスにおける女性の出版業への参入は、1600年代の印刷出版業組合(Stationers' Company)にさかのぼり、それ以降も小規模の出版業への関与が認められる(Riley, *Virago* 4)。「フェミニスト出版社」の最初の例で、「現代のフェミニスト出版社の先駆」(Murray 23)ともされるのは、女性参政権支持者のエミリー・フェイスフル(Emily Faithful)が1860年にロンドンで興した、女性のみから成るヴィクトリア・プレス(Victoria Press)であり、それを可能にした背景として、19世紀における女性の教育機会や識字率の向上などが挙げられている(Riley, *Virago* 4)。さらに20世紀に入ると、女性参政権獲得に賛同する出版社が、第一次世界大戦以前の時点で少なくとも11社存在していたとされ、そのうちのひとつがヴァージニア・ウルフのホガース・プレス(Hogarth Press)であった(Riley, *Virago* 4)。出版業は一定の社会的地位を持つ女性に適した職とみなされるようになり、大戦間の比較的早い時期に女性に開かれた職業となった(Cadman, Chester and Pivot 17)。

とは言え、富裕層出身のエリート男性が担う「紳士の職業」という出版業の傾向も依然根強く (Cadman, Chester and Pivot 17, 19)、こうした構造の問題点は、いわゆる「門番理論 (gatekeeping theory)」により説明されてきた。つまり思想や芸術等の領域において重要性や価値を決定する「門番」が一方のジェンダー (男性) に偏る限り、そこに形成される「文化」も特定の偏りを免れず、それが女性芸術家や作家の不在の要因ともなっていると考える考え方である。このような観点から言えば、ヴィラゴ・プレスをはじめとするフェミニスト出版社の創業による女性の出版業への参画の意義はおのずと明らかであろう。つまり、文化の「門番」の一翼を担う出版や編集業に女性が関わることで、文学をはじめ知の体系そのものに修正を迫ることが可能になると考えられるためである。⁷ 実際、ヴィラゴ・プレスの創業者の一人カーメン・カリル (Carmen Callil) は、同社設立の意図が、「男性作家に独占されている文学カノンの中心に、女性の作品を位置づけること」、「女性に出版の場を提供すること」にあったと語っている (“Women …” 185)。

1973年にカリルを含む三人の女性により、ロンドンで創業したヴィラゴ・プレスは、⁸ 当初カルテット・ブックス (Quartet Books) の提携会社という位置づけだったが、1976年に独立を果たした。1970年代には他にもオンリー・ウィメン・プレス (Only Women Press) やウィメンズ・プレス (The Women's Press) などがロンドンで創業しており、フェミニスト出版社の存在は1980年代にかけて定着していった。1985年版の『フェミニスト・メディアのインデックス・住所録 (*Index/Directory of Feminist Media*)』には、女性が所有する出版社として75社以上の記載があったとされる (Tuttle 263)。

ヴィラゴ・プレスは、1975年に最初の書籍を刊行後、1977年に「リプリント・ライブラリー (Virago Reprint Library)」、翌78年に「モダン・クラシックス・シリーズ」、さらに「トラベラーズ・シリーズ (Virago Travellers Series)」、「エデュケーション・シリーズ (Virago's

Education Series)」、[Vシリーズ (Vs Series)] といくつかのシリーズを手がけたが、同社を代表する出版物はやはりモダン・クラシックス・シリーズと言って良いだろう。ホワイトの『五月の霜』を皮切りに、数多のタイトルを抱えるようになった同シリーズは、濃緑色の背表紙とともに、広く一般に認識されるようになった。そして「文学における女性の伝統の存在を示すこと」(Coonan vii) という同シリーズの趣旨は、実際に、「文学史の再形成、カノンの拡大に大きな影響を与え、多くの女性の声を包摂する」ことになった (Riley, *Virago* 45)。

とは言え、同シリーズに対する批判がまったくなかったわけではない。作品が白人英語話者の体験を語るものに偏り、少数民族集団のそれを捉える試みがなされていない (Chisholm)、「中産階級的感性への迎合」である (Riley, *Virago* 44)、再版に集中することで新作を犠牲にしている (Cadman, Chester and Pivot 31) などである。しかし1980年代の女性運動の変化、すなわち人種的・性的マイノリティ、労働者階級が声を上げるようになったことを受け、ヴィラゴ社 (や他のフェミニスト出版社) は、多様性を反映した作品の出版を拡大した。一例として、「レズビアン・シリーズ」の創刊がある。また旧作の再版が占めていたモダン・クラシックス・シリーズも次第にその対象を広げ、パトリア・ハイスミス (Patricia Highsmith) ら、現代の女性作家も含めるようになっていく。同シリーズは過去10年間の出版物の三分之一を占めるとされ (Riley, *Virago* 155)、現在も同社の理念、利益の双方において重要性を維持している。

2. 女性の作者性の不可能性

モダン・クラシックス・シリーズの趣旨を考えると、その第一弾にアントニア・ホワイトの『五月の霜』が選ばれたことは、決して偶然とは思われない。むしろ十分に意図された、また意義深い選定であったと考えられる。一つには、同作が1933年に出版され好評を博しながら、その後次第

に忘れ去られていった佳作であったこと、⁹もう一つは大戦をはさんで発表された続編『失われた旅人 (*The Lost Traveller*)』(1950)、『砂糖の家 (*The Sugar House*)』(1952)、『ガラスの向こう側 (*Beyond the Glass*)』(1954) と合わせた「四部作」が一貫して女性の著作の困難と挫折を主題とし、またその困難はホワイト自身のそれでもあったことで、文学における女性作家・作品の疎外を問い、その再発見、再評価を試みる初期フェミニズム批評や、それを出版を通じて推進しようとする同シリーズの趣旨を体現するものであったからである。¹⁰

実際、1978年の再版時に序文を寄せたエリザベス・ボウエン (Elizabeth Bowen) も、「あらゆる古典と同様、この作品も時の経過とともにいっそう深い意味を獲得した。1933年の初版時から現在までの間に、我々の価値は意識的、無意識的に大きく変化している。この作品は、当時よりも現在において、よりいっそう理解され得るだろう」(142)として、この作品の現代的な意義(1970年代当時における)を強調した。ボウエンは、再版までの半世紀近くの間を生じた「価値・・・[の] 変化」が何であるか、つまりこの作品がより理解され得ると考えられる具体的な理由を述べてはいない。しかしこの作品の唯一の類似をジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の『若い芸術家の肖像 (*A Portrait of the Artist As a Young Man*)』(1916)に見出し得るとしていること、同作が主人公の少年の作家としての将来を予兆する点においてホワイト作品と対照をなすことを考え合わせるとき、ボウエンが初期フェミニズム批評と交差するある問題、すなわち文学や著作においてジェンダーが果たす決定的な意味、さらに言えば、女性の「作者性 (authorship)」の不可能性を示唆していた可能性は十分にある。

『五月の霜』は、父のカトリックへの改宗にともない、寄宿制の修道院付属学校に学ぶことになった9歳の少女、ナンダ・グレイ (Nanda Grey) の13歳までの学園生活を描いている。カトリック教会の教会暦を時間軸にとりながら描かれる厳格な行事や日課は、この作品に宗教的な色彩の濃い学園小説の趣を与えており、ボウエンもこの作品をそうした

ジャンルに位置づけたうえで、「本作は古典となるべき唯一の学園小説ではないが、これほどの珠玉の作品は他に思いつかない」(137)との賛辞を寄せている。ただしこの作品は、ハッピー・エンドを迎えない点において、唯一学園ものの定式から逸脱しているともする。たしかに『五月の霜』は、ナンダが学園から放校を言い渡されることで幕を閉じる。そしてそれは、彼女の小説の習作が見咎められたことによるのである。カトリック教会を舞台に若い主人公の成長を描く教養小説という点において『若い芸術家の肖像』との共通性を持ちながら、主人公が作家という夢の実現に向けた旅立ちで終わるジョイス作品に対し、十代半ばにして文筆への道を閉ざされる『五月の霜』の結末は、文学や著作への参加が主人公のジェンダーにより異なって作用することを印象づけるものとなるのである。実際、ホワイトはこのジョイス作品に強い影響を受けたことを認めており (*Hound* 115)、『五月の霜』は同作に対する「女性版の回答として意識的に書かれ」た「若い『女性』芸術家の肖像」ともされてきた (Marcus 598; Williams 103)。

そもそもこの物語の舞台である修道院付属学校が「絶対的な・・・権威を表し」ていることは (Bowen 140)、各種の教会行事を執行し、規律や賞罰のシステムにより生徒を統制するあり方にも見て取れる。さらに、2018年版に序文を寄せたテッサ・ハドリー (Tessa Hadley) はそれが男性中心的な権威であることも指摘し、「修道院付属学校の女性や少女たちは、ある意味で男性の管理体制下に存在している」としている (viii)。そして、「ナンダの反抗」が向けられるのは、こうした「学園・・・に対して」(Bowen 140) に他ならない。彼女がかつて自身が読んだロマンス小説を模し、ひそかに書き溜めた小説の習作の反キリスト教的な内容や、芸術を通して自己表現を試みる行為自体を見咎められ、放校を言い渡されることは、したがって、学園、ひいては修道院やカトリック教会という厳格な組織と若い主人公の自我の発達、信仰と次第に目芽え始める作家への夢との間の相克として捉えることができるのである。

主人公ナンダの習作はまた、伝統的に男性の属性であると考えられてきた作者性への介入をも意味することで、二重に問題をはらむものとなる。西欧において作者性は伝統的に男性と結びつけられ、文学も男性に独占され、必然的に女性は周縁的な存在として位置づけられてきた。『五月の霜』と『若い芸術家の肖像』は、文学作品にまつわる数々の挿話が主人公の内的な成長段階と文学への嗜好の発展を物語る仕組みになっている点において共通性を持つが、過去の文人たちの業績に触れながら文学という男性文化の伝統に参加し始める『若い芸術家の肖像』の主人公に対し、『五月の霜』では主人公のモデルとなる同性の存在が見当たらず、彼女が手にする作品の著者がすべて男性であるという事実は、文学と男性との結びつきを強調するとともに、彼女を疎外するものとなる。そして実際に彼女は、あたかも小説をものしようとしたことで伝統的に男性の所有物と考えられてきた著作の文化の領域を侵したことへの断罪であるかのように、学園を追われることになるのである。

『五月の霜』における、男性の文化伝統に属するとされてきた著作から疎外された主人公の状況は、ホワイトのそれでもあった。ナンダと同様、父親の改宗にともない、ローハンプトンの聖心修道院付属学校 (Convent of the Sacred Heart at Roehampton) に学んだホワイトは、¹¹そこで書きかけの小説を取り上げられた経験があり、それが長年にわたり執筆を妨げることになったとされる (Hadley vii)。書くことへの不能感からたびたび深刻なスランプに陥り、何年もの間フロイト精神分析療法を受けるなどの経験もしている (Hopkinson 34-36)。『五月の霜』とその続編を書くまでも、それぞれ十数年を要したとされ、それが四部作の主人公たちに反映され、著述を試みながら、それに挫折する女性像が描かれることになった。ホワイトは四部作に続く第五作執筆の希望も持っていたとされるが、それがかなうことは終生なかった。

数十年を経ての『五月の霜』の再版を機に、ホワイト作品は新たな関心を集め、それに続く作品群や短編集、ノンフィクションが相次いで刊行さ

れるとともに、1982年には四部作がBBCによりドラマ化された。¹²また再評価の機運も急速に高まり、作品の様々な側面からの批評も試みられるようになった。例えばモダニズムの文脈では、クレア・ハンソン (Clare Hanson) が、ホワイトに加え、エリザベス・ボウエン、ロザモンド・レーマン (Rosamond Lehman)、エリザベス・テイラー (Elizabeth Taylor) といった「典型的なヴィラゴ・モダン・クラシックス」小説の書き手たちは、1930-60年のモダニズム後の時代に、ハイ・モダニズムのカテゴリーに挑み、女性モダニストのテキストに欠けていた身体の表象に取り組んだとして評価した (66-70)。またニコラ・ハンブル (Nichola Humble) も、ホワイトはミドルブラウ作家からモダニズム史へと組み入れられるようになったと指摘している (24-25)。一方、ホワイトの著作を精神疾患との関係において論じる研究として、パトリシア・モラン (Patricia Morran) の『アントニア・ホワイトと躁鬱の病 (*Antonia White and Manic-Depressive Illness*)』が、『五月の霜』の再版40周年に合わせるかのように、2018年に発表されている。[[モダン・クラシックス・シリーズで] 再版された本は、新たな批評、研究の道を創出した] として、ホワイトがその一例にも挙げられた通り (Riley, *Virago* 58)、ホワイト研究は進展しつつあるわけである。

このように、『五月の霜』を再版・再読することの意義としては、男性が究極的な権威を掌握する文学という体系において、困難と挫折を強いられる女性の生に耳を傾けることで、『若い芸術家の肖像』を芸術家の内的な発達を描く絶対的なテキストとしてでなく、新たに相対的な視座から読むことを可能にする点が挙げられよう。そしてそれが文学カノンの見直しと再形成に直接関わるものであることは、言うまでもない。ヴィラゴ・プレスのホームページには現在も、「カノンを変える (“Changing the Canon”）」というフレーズが掲げられているが (“About Virago”」、これはフェミニスト出版社現象以来半世紀余りを経た今なお、有効な指針であり得る。文学賞や書評におけるジェンダー比に依然として存在する大き

な偏りは、¹³文学カノンの見直しが現在も継続中の課題であることを示しているからである。

以上のように、ヴィラゴ・プレスを中心とする「フェミニスト出版社現象」、また同社のモダン・クラシックス・シリーズに代表される出版物は、文学や批評のあり方の再考と再形成に一定の貢献をしてきたと考えられる。一方、女性の作品に利益の上がる市場を見出した大手出版社は、1980年代以降、フェミニスト出版社を自社に編入する動きを見せるようになった。「フェミニスト出版社は、ある意味で自身の成功の犠牲になったのだ」と言われる所以である (Riley, *Virago* 59)。次稿は、そうした動向にあってヴィラゴ・プレスが下した経営判断、またその評価を(再)検討していきたい。

注

- 1 第二波フェミニズムに始まる女性出版社の興隆やその周辺の動向は、「フェミニスト出版文化 (feminist print culture)」(Harker and Farr)、「出版運動 (Print Movement)」としても論じられているが、本稿ではライリーの著作のサブタイトルに倣い、以後も「フェミニスト出版社現象」とする。
- 2 この会議は500名以上の参加者を集め、当初予定されていた会場のオックスフォード大学ラスキン・コレッジをオックスフォード・ユニオンに移して行う盛況ぶりだったという (Walters 108)。
- 3 労働者階級女性は黒人女性と同様、女性解放運動グループの外部にとどまることになった。運動の中心が中産階級となったためだが、労働者階級女性とのコミュニケーションも試みられ、ダゲナム工場の女性機械工によるストへの支援も申し出ていたとされる (Walters 108)。
- 4 こうした意味で、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) が『自分ひとりの部屋 (A Room of One's Own)』(1929) で「空の本棚」(69)

として表象した女性作家の作品の不在やジャンルの偏りの指摘、また文学カノンに含まれるごく一部の女性作家以外の存在にも目を向けるその姿勢は、フェミニズム批評の原型を形作ったと言っても良いだろう。また16、7世紀に女性詩人や劇作家が存在しなかったとする同書の記述自体、現在までに修正されていることは（片山 264）、そうした批評の成果に他ならない。

- 5 男女という二元論に立ち、作家の性アイデンティティを絶対的な拠り所としながら作品を論じる手法は、後に批判の対象ともなったが、フェミニズム批評を切り拓いたという意味で、ともに記念碑的な著作と言える。
- 6 シリーズ第一作こそ歴史書であったとされるが、第三作にはシャーロット・パーキンス・ギルマン (Charlotte Perkins Gilman) の『黄色い壁紙 (*The Yellow Wallpaper*)』(1892; 1973) が選ばれている。ハウ自身、英文学研究者として大学で教鞭をとり、後に米国近代語協会 (Modern Language Association; MLA) 会長を務めた経験も持つ。彼女の手記には、自身の女性作家への関心が、黒人作家を除外する文学カノンへの疑問から始まり、それが出版社の創業やシリーズ刊行へと向かった経緯などが綴られている (Howe)。1970年代以降のアメリカにおける「フェミニスト出版文化」については、Harker and Farrを参照のこと。
- 7 ライリーが文学賞や書評におけるジェンダーの偏りと、それを是正する試みとしての、女性作家を対象とする文学賞の創設 (女性小説賞; Women's Prize for Fiction) 等を取り上げるのも、同様の観点によるものである (*Feminism* 31-37)。
- 8 他の2人は、すでにフェミニスト雑誌『スペア・リブ (*Spare Rib*)』を手がけていたマーシャ・ロウ (Marsha Rowe) とロージー・ボイコット (Rosie Boycott) だったが、彼らは1975年のヴィラゴ・プレス第一作刊行後に同社を去り、代わりにアーシュラ・ロウ (Ursula

Rowe) とハリエット・スパイサー (Harriet Spicer) が加入することになった。社名の「ヴィラゴ」の命名はボイコットによるとされ (Riley, *Virago* 16)、「勇ましい女兵士」(“About Virago”) を意味する。さらにエレン・ギルバート (Ellen Gilbert) らはそれを語源にまでさかのぼり、同社のロゴである「齧ったリンゴ」とも併せ、考察している (Gilbert, Decotils, and Schartel 84–86)。

9 ショーウォールターの『女性自身の文学』の巻末に付された、213名の女性作家の「略伝資料」中にもその名が挙げられていたホワイトは (349)、かねて再発見・再評価の対象の一人と目されていたことが分かる。

10 このことは、現在までに数百名の「失われた」女性作家の作品を再版してきたアメリカのフェミニスト・プレスのリプリント・シリーズ第三作として、ギルマンの『黄色い壁紙』が選ばれたことも思い起こさせる。出産後の不安定な精神状態の治療として、ものを書くことを含む知的活動を禁じられた女性主人公・語り手を描く、自伝的ともされるこの小説は、同シリーズにより再版されると異例の売り上げを記録し「完全に正典化された」(Howe 147)。ちなみに同書は、1981年にヴィラゴ・プレスのモダン・クラシックス・シリーズ中の一作としても再版された。

11 その後、セント・ポール女子校 (St Paul's School for Girls)、王立演劇アカデミー (Royal Academy of Dramatic Art; RADA) へと進んだホワイトは、戦間期にはジャーナリストとして数編の短編を書き、第二次大戦中はBBCや外務省政治諜報局のフランス部門に勤めた。三度の結婚をし、二人の娘はいずれも後に作家になっている。

12 四部作以外のホワイトの著作としては、短編集が1編、エッセイが4編、日記2編の他、フランス語小説の英訳書が30編以上ある。翻訳以外はすべてヴィラゴ・プレスから出版・再版されている (White, *Frost* n. p.)。ホワイトは1978年の『五月の霜』の再版を喜んだとされるが

(Coonan viii)、2年後に死去した。

13 ライリーは、「現実として、主流の書評や賞の文化は男性に有利に働いてきたし、また今なおそうである」としたうえで、ブッカー賞 (The Man Booker Prize for Fiction) を例にとり、1990年代後半から2000年代後半の受賞者の男女比 (おおよそ3対2) が、賞の創設後30年間のそれと大差のないものであるとした研究を紹介している (*Feminism* 36)。また書評についても、アメリカのある組織の2010年の調査結果を引き、『タイムズ文芸付録 (*Times Literary Supplement*)』、『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス (*London Review of Books*)』の両誌で、書評家及び書評の対象となる作品の書き手の男女比がいずれも3対1程度であるとし、「こうした書評の偏向を問う必要性は今も継続している」(Riley, *Feminism* 28) としている。

Works Cited

- “About Virago.” *Hachette UK*. 26 June, 2020. <https://www.virago.co.uk/imprint/lbbg/virago/page/about-virago/>.
- Bowen, Elizabeth. “Elizabeth Bowen on Antonia White.” *Writers as Readers*, Virago Press, 2018, pp. 135–42.
- Cadman, Eileen, Gail Chester, and Agnes Pivot. *Rolling Our Own: Women as Printers, Publishers, and Distributors*. Minority Press Group, 1981.
- Chisholm, Kate. “Female Friendly: Progress in Publishing, and the Distance Still to Go.” *Times Literary Supplement*. 10 Aug. 2018.
- Coonan, Donna. “Introduction.” *Writers as Readers: A Celebration of Virago Modern Classics*. Virago Press, 2018, pp. vii–xi.
- Gilbert, Ellen, Crystal Decotils, and Teresa Schartel. “‘What Women Can Do When They Put Their Minds to It’: Ellaine Showalter and Virago Press.” *The Journal of the Rutgers*

- University Libraries*, vol. LXI, 2005, pp. 76–88.
- Hadley, Tessa. “Introduction.” *Frost in May*, Antonia White, Virago Press, pp. vii–xii.
- Hanson, Clare. “Marketing the ‘Woman Writer’.” *A Woman’s Business: Women, Writing and the Marketplace*, edited by Judy Simons and Kate Fullbrook, Manchester UP, 1998, pp. 66–80.
- Harker, Jaime, and Cecilia Konchar Farr, editors. *This Book Is an Action: Feminist Print Culture and Activist Aesthetics*. U of Illinois P, 2016.
- Hopkinson, Lindall P. “The Old Demon, Fear.” *A Virago Keepsake to Celebrate Twenty Years of Publishing*. Virago Press, 1993. 32–37.
- Howe, Florence. “Lost and Found—and What Happened Next: Some Reflections on the Search for Women Writers Begun by The Feminist Press in 1970.” *Contemporary Women’s Writing*, vol. 8, no. 2, 2014, pp. 136–55.
- Humble, Nichola. *The Feminine Middlebrow Novel 1920s to 1950s: Class, Domesticity, and Bohemianism*. Oxford UP, 2001.
- Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Penguin Books, 1992.
- Marcus, Jane. “Antonia White (1899–1980).” *The Gender of Modernism: A Critical Anthology*, edited by Bonnie Kime Scott, Indiana UP, 1990.
- Morran, Patricia. *Antonia White and Manic-Depressive Illness*. Edinburgh UP, 2018.
- Murray, Simone. *Mixed Media: Feminist Presses and Publishing Politics*. Pluto Press, 2004.
- Riley, Catherine. *The Virago Story: Assessing the Impact of a Feminist Publishing Phenomenon*. Berghahn Books, 2018.

- Riley, Catherine, with Lynne Pearce, *Feminism and Women's Writing: An Introduction*. Edinburgh UP, 2018.
- Showalter, Elaine. *Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to hessing*. 1977. Virago Press, 1982.
- Thornham, Sue. "Second Wave Feminism." *The Routledge Companion to Feminism and Postfeminism*, edited by Sarah Gamble, 1998, Routledge, 2001, pp. 29–42.
- Tuttle, Lisa. *Encyclopedia of Feminism*. 1986. Arrow Books, 1987.
- Walters, Margaret. *Feminism: A Very Short Introduction*. Oxford UP, 2005.
- Whelehan, Imelda. " 'The Monstrous Regiment': Literature and the Women's Liberation Movement." *The History of British Women's Writing, 1970s–Present*, edited by Mary Eagleton and Emma Parker, Palgrave Macmillan, 2015, pp. 114–29.
- White, Antonia. *Frost in May*. Virago Press, 1978.
- . *The Hound and the Falcon: The Story of a Reconversion to the Catholic Faith*. Virago Press, 1980.
- Williams, Merryn. *Six Women Novelists*. Macmillan, 1986.
- "Women, Publishing and Power: Judy Simons Interviews Carmen Callil." *A Woman's Business: Women, Writing and the Marketplace*, edited by Judy Simons and Kate Fullbrook, Manchester UP, 1998, pp. 183–92.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. 1929. Vintage, 2018.
- 片山亜紀「訳者解説」、『自分ひとりの部屋』ヴァージニア・ウルフ、平凡社、2015年、252–69頁。
- 英美由紀、「若い『女性』芸術家の肖像——アントニア・ホワイト『五月の霜』」、*Otsuka Review*、第35号、1999年、98–111頁。